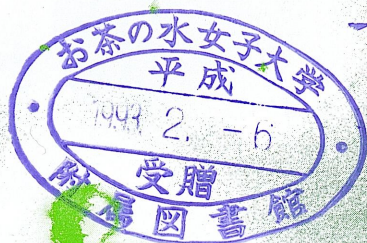


幼児の教育

家庭・保育所・幼稚園

1993 3

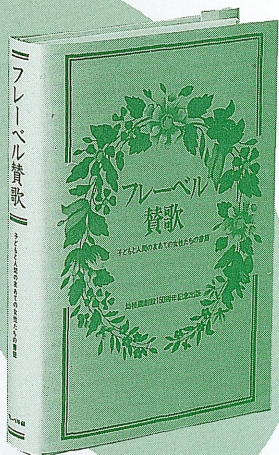


第92巻 第3号 日本幼稚園協会

フレーベル先生・幼稚園創設150周年記念出版

フレーベル賛歌

—子どもと人間の友あての女性たちの書簡—



旧ドイツ民主共和国アカデミー文庫と、パート・ブランケンブルクのF・フレーベル博物館に、フレーベルにあてた教え子たち約200人の1,000通を越える書簡が収蔵されています。一部公刊されていますが、それらを除いた約140通の書簡がドイツ幼稚園創設150周年を記念して1990年に出版されました。本書はその完訳本です。

書簡はドイツ教育委員会と大学教育学部の委嘱をうけたH・ケーニツヒ教授の手によって精選され、年代順に配列されています。「さあ、私たちの子どもたちに生きよう！」という先生の呼びかけの言葉と、その根源にあたるキンダーガルテンの思想と、当時の社会や経済の困難さや人々の無理解とたたかう優れた魂に触れることができます。フレーベルを敬慕しキンダーガルテンの運動に身を挺した女性たちの知性と情熱を具体的によみがえらせます。

● 推薦します。

広島大学名誉教授／日本ベスタロ
ッチ・フレーベル学会会長

荘司雅子

全国国公立幼稚園長協会会長

江橋照雄

日本保育学会会長

岡田正章

全日本私立幼稚園連合会会長

小林龍雄

全国保育協議会会長

水岡 薫

特 色

- 幼稚園草創期のフレーベル先生の教え子たちの手紙を年代順に紹介し、その揺籃期に生きた人々の苦難と歓喜にいろどられた歴史的証言を集成しました。
- 師・フレーベルに寄せられた教え子たちの数々の手紙は、幼児教育の父フレーベル先生の魅力ある人間像と教育思想のエスプリを余すところなく浮き彫りにします。
- “キンダーガルテン”運動に身を挺した女性たちの英知と情熱にあふれる生き方、考え方は示唆に富み、幼児教育・保育に携わる人々の使命感を喚起します。
- 幼稚園の園長や保育者の立場からの保育内容や方法に関する相談や報告が多く、保育現場の得難い保育実践上の参考資料です。
- 女性たちがいち早く獲得した職業的地位である幼稚園教員、保育者たちの苦難の歩みが生々しく表白されており、女性職業史、婦人解放運動史の貴重な資料です。

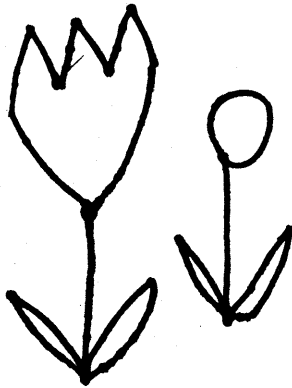
岩崎 次男 他16名・訳

A5判・420頁・写真資料32葉・定価4,000円(税込)

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)3292-7783(代)にお問い合わせください。

キンダーブックの
フレーベル館

幼 児 の 教 育



第92卷 第3号

幼児の教育 目次

——第九十二卷 第三号——

© 1993
日本幼稚園協会

△巻頭言△かんしゃく……………藤原 正彦…(4)

原点……………津守 真…(6)

幼児期の歯科保健……………井上 直彦…(9)

特集△なおす△

治る^{なお}……………宮川 明子…(18)

本を直す ……本は利用され続ける文化財……………久芳 正和…(21)

おもちゃを直す……………松尾 達也…(24)

なおす・なおる……………田中三保子…(30)

土器の復元……………吉岡 恭平…(33)



自分の健康は自分の手で……………堤 喜久雄…(36)

保育への視座(8) 若い保育者の方々へ……………河邊 泉…(41)

公教育は家庭教育にどこまで関与するか(2)

保育所の窓からのメッセージ……………浪川美知子…(46)

ある日の育児日記から(27)……………佐藤 和代…(54)

婦人宣教師、ミセス・プラインの「おばあちゃんの手紙」(6)……小林 恵子…(53)

表紙・紺野 千秋／扉題字・堀合 文子

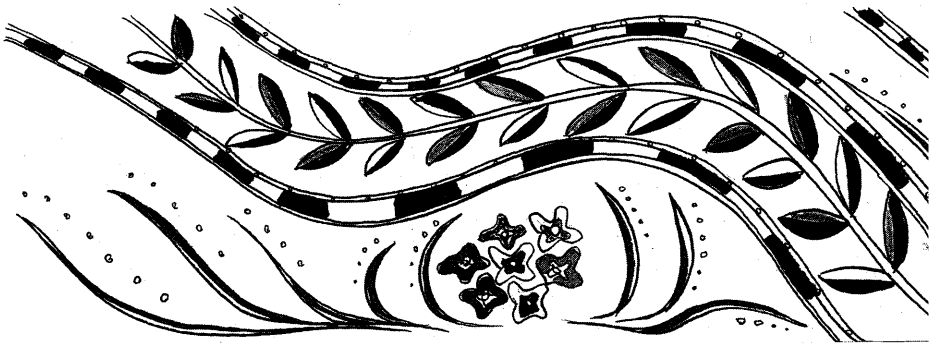
扉カット・お茶の水女子大学附属幼稚園園児

カット・福田 理恵

編集委員・本田 和子／田代 和美

田中三保子・岩上 節子

編集部・大沢 啓子



かんしゃく

藤原 正彦

長男は二歳の頃、かんしゃくをやたらに起こした。

何か気に食わぬと哺乳びんを放り投げたり、金切声をあげたりした。どうしたものかと、女房と長時間にわたって話し合ったが、なかなか納得のいく結論が出ない。時にはうっかり私が、「かんしゃくは君の血じゃないか。幼い頃かんしゃくを起こしただろう」、などと口を滑らし乱戦模様になったりもした。

女房の専攻した発達心理学も、こんな時はほとんど頼りにならない。手許にあったホワイト博士の育児書を開くと、「かんしゃくを放置すると自制力のない人間に育つから、決して許してはいけない」、という趣旨のことが書いてある。私はなるほどと思うし、育児書にやや懐疑的な女房も、迷いを深める。念のためと

書店で別の育児書を見たら、「かんしゃくを起こしたら、おさまるまでじっと抱きしめてあげなさい」とある。

矛盾する処方せんにすっかり混乱した私は、同じ大書にいたる専門家のH教授に、伺ってみることにした。私の話を聞いた彼女は、なぜかケタケタとしばらく笑い続けた。そして、「育児書はみな違うことを言っています」とおっしゃった。ややあきれた私が、「矛盾することが書かれていて、いったい育児学は学問と言えるのですか。理論はないのですか」と言うと、「はい、数学とは違って、理論も公式もありません」と平然とおっしゃる。「それでは親はどうしたらいいんですか」となれば抗議調で問うと、「夫婦でよく話し合っ

て、最もよいと思つた方法をとるのがよいと思ひますよ、と振り出しに戻すようなことをおっしゃつて、またケタケタと笑われた。

帰宅して女房に伝えると、肩の荷が軽くなったような表情を見せたが、私の方はかえつて重くなった気分だった。「決して許さない」というのは、子供の気持ちも尊重したい、という女房に斥けられ、「じつと抱きしめる」、は私が拒否した。せつかく牛乳を温め、哺乳びんに入れ、手渡したとたんに投げ捨てられたりすれば、こちらの腹の虫が治まらない。

結局は統一方針を持つに至らず、それぞれが自分の流儀で対処することとなった。私は、「張り飛ばしてから抱きしめる」にした。女房はいろいろ話しかけたら、相手にしなかつたりが多かつた。

現在、長男は小学校六年生である。我々の仕方がよかつたのかは、今もこれからも分からない。別の仕方をとればどうなつたか、知りようがないからである。

ヒットラーの如き人間が、一万人位の子供達を集め

て、十数年にわたる非人道的実験を行えば、どんな子育てがどんな大人を作るのか、因果関係がかなり解明されるのだろうか、酷すぎてヒットラーにも実行出来まい。

たとえいつの日か、何らかの方法で因果関係が解明されたとしても、親は何を選択してよいか困るだろう。自制力が強ければ強いほどよい訳でもなく、やさしいほどよい訳でもないからである。

たとえ苦しい選択をしても、プログラム通りに實際の子育てをするのは、環境要因が複雑過ぎて至難の技だし、万が一実行できても、子供により同じプログラムに全く異なる反応をする場合もある。そもそもそうやって子供を鑄型にはめよう、という発想自体も容認しがたい。

H教授は、今頃になつて私が気付いたこれらのことを、全て見通した上で、かんしゃくの公式を性急に求める数学者のかんしゃくを、ケタケタ笑つたのだろう。

(お茶の水女子大学理学部数学科)

原点

津守 真

毎日、大人の肩の上に乗っている子どもがいた。あるとき、私は、その子を肩に乗せて歩きながら、この子を本当にあるがままにお前は認めているのかと自問自答した。そして、君は口をきかなくとも、肩の上に乗っているだけでも、いまのまままで立派に一人前なんだよと言った。そうするとその子は私の肩からおり、私の机の前の回転椅子に座って、椅子をひと回り回転させるたびに私の顔を見て、にこっと笑った。私は子どもとの距離が縮まり、急に親しくなったような気がした。一緒にいる大人が心に思っていることは、それを言葉に出すかどうかを問わず、直接に子どもに伝わっていることを私は実感した。

一日の大部分を大人に抱かれて階段を上り下りしたり、歩き回ることを欲する子どもがいた。その子は四歳なのにとでも重たく感じられた。私はその子を抱きながら、こうして次第に体重が重くなったら、その子の足は体を支えられなくなり、ますます歩行が困難になるのではないかと心配した。そう考えると、できるだけ歩かせようと試みることになる。その子はそれを嫌がって、抱かれて歩くことを強く要求した。あるとき、私は、この子は移動したいときにはいざったり、大人に助けを求めるのだから、一生歩けなくてもかまわないではないかと考えた。そのときから気持ちも軽くなり、抱いたときの重量感も減少した。私だけでなく、何人もの大人がその頃同じようなことを経験していた。ある日、その子は廊下をたったひとり歩いて歩いていた。その足は体重を立派に支えていた。以来、その子は殆ど自分の足で歩いて移動している。私は母親に私共の気持ちの変化を話すと、母親はすぐに同意して、極端なようだけど、一生歩けなくともいいと覚悟がきまると、何もかもが変化するようですと言った。この十年間に、沢山の親たちが私に同様のことを語ってくれた。そして沢山の子どもたちが、あれこれの能力の増加だけでなく、人間的なふくらみをもって成長している姿を見せてくれている。

子どもに、少しでも上の段階のことができると期待するのは、親の自然の情と言う人もある。けれども、ひとりひとり違う子どものあるがままを認めて、日々を一緒にたのしんで過ごそうと考えはじめると、大人は自分の規準に固執することをやめ、自分自身

を変化させることが可能になる。親になること、保育者になるということは、子どもをあるがままに認めるという、子どもとの関係の原点に日々立ちもどることである。原点は、日々新たに子どもにふれることによって、日々発見し直される。すなわち、保育者も子どもも日々成長する。

(愛育養護学校)



幼児期の歯科保健

井上 直彦

はじめに

歯科医がむし歯予防に熱中し、お母さんたちが歯みがきに精を出しているうちに、今、子どもたちの口の中にはもっと大きい問題が起こってきています。

食生活が変わって、あごを使うことが少なくなったために、あごの発育が低下し、*「かめない子・のみこめない子」*、歯並びが悪い子ども、少し大きくなるとあごの

関節症を起す子どもなどが増えてきているのです。もう、むし歯だけにこだわっている時ではありません。

歯の健康についての考え方は、今、ひとつの転換期を迎えています。むし歯中心の今までの考え方と、最近大きく浮上してきたあごの発達の問題との調整がまだ終わっていないからです。新旧の情報混乱があり、不明な点や不安なことが多いと思います。今回は、このことについて少しでも解説できればと考えて筆をとります。

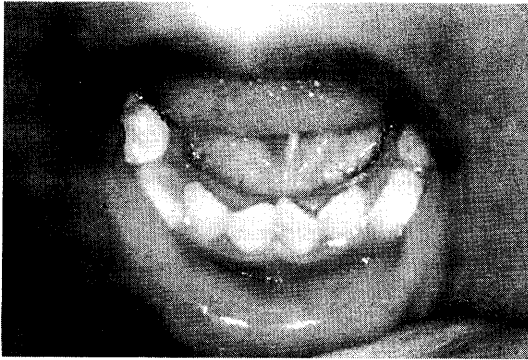
歯肉炎から始まる口の病気

歯の汚れに最も敏感に反応して起こる病気というと、それは虫歯だと思う人が多いようです。でも、それは誤りで、一番はじめに起こるのは、実は歯肉炎なのです。

歯肉炎という病気は、今まで、あまり問題にされてきませんでした。もともとは成人病であり、少し前までは、子どもにみられることがほとんど無かったからです。

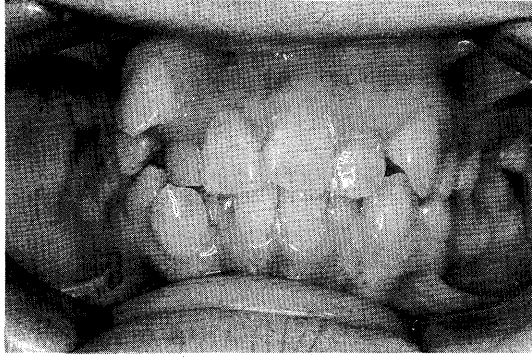
図1は、一歳八か月の子ども歯肉炎を示すものです。隣合った歯と歯との間の、本来ならば薄いピンク色をしていて、尖った形をしているはずの歯肉（歯ぐき）が丸みを帯びて、赤くなっています。これが歯肉炎の最初の状態ですが、放っておくと歯肉が歯に接している部分に沿って赤くなり、だんだん歯肉全体に広がり、最後は重症の歯周病になります。

子どもたちの歯肉炎は、今のところ歯肉の炎症にとどまっていますが、三歳の幼児でさえ、半数以上のものが



▲図1 幼児にみられる歯肉炎

1歳8か月の女児。下あご前歯部の歯と歯の間の歯肉が腫れています。歯肉炎の初期症状は、お母さんにも、子どもにもよく見える病気であり、ここを見ることによって、現在の食生活がうまくいっているかどうか容易に分かります。



▲図2 あごが小さくなったために起こる不正咬合（叢生）

11歳の女兒。不正咬合にはいろいろな型のものがありますがここに示すような歯がでこぼこに並んでいるものが、あごが小さくなったために起こったものです。

歯肉炎をもっています。小学校三年生で七〇パーセントに達し、その後、中学、高校時代を通じて七〇パーセント前後の高い水準のまま発達期を経過します。

歯肉炎になるのは食物によって歯が汚れるためです。この状態が続けば、三か月、半年と経つうちにむし歯ができ始めます。歯肉炎やむし歯ができてゆくのを、まだそのまま放っておくと、永久歯に生え変わる頃から、歯並びが悪くなっていることに気がつくようになります。図2はその一例ですが、あごが十分に大きくなれなかったために、歯が並びきれない状態がよく分かります。これは、そしゃく器官の発育が低下していることを意味するものです。口に限らず、発育の低下は、気がついたときには手遅れで、決して取り返すことはできません。

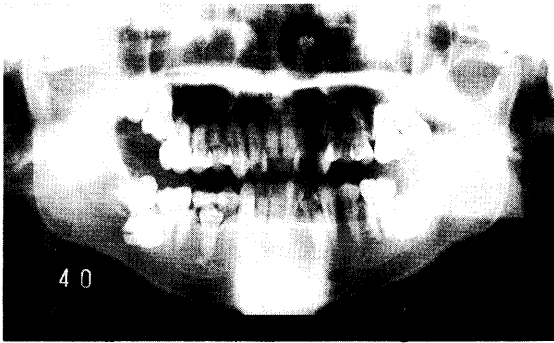
小学校の高学年になる頃から、次の問題が始まります。若年者顎関節症と呼ばれるあごの関節症です。あごの関節症も、もともとは成人病ですが、あごをあまり使わなくなったためにあごの関節の発育も低下し、少し大

大きくあくびをしたり、ちょっとあごを使いすぎたりすると、すぐに関節症を起こします。耳の孔のすぐ前にある、あごの関節の部分でコキコキというような雑音があり、口を大きく開けたり、ものをしっかりと噛みしめたりするとこの部分が痛む状態です。

子どもがあごの関節症は幸いに軽く、あごをいたわって大事にしていけば一―二週間で治ります。しかし、ちょっとしたきっかけて再発するので注意が必要です。

現在、若年者顎関節症を経験しているものは、小学校の高学年で八パーセント、中学生で二八パーセント、高校生では三三パーセントに達しています。あごの関節が弱い子どもたちが、将来、四〇代、五〇代になったとき、どんなことになるのか、想像するだけでも恐ろしいことです。

親知らずが生えきれなかったり、親知らずのまわりが腫れたりということは、よく知られています。図3に示すのは、親知らずだけではなく、そのひとつ前の第2大臼歯までが生えられない状態です。こんなことが起こり



▲図3 第2大臼歯の埋伏

19歳の男子。親知らずが生えきれないのは、現在では普通のことになっています。最近、そのひとつ前の第2大臼歯までが生えられなくなってきはじめました。

始めたのも、あごが大きく育たなくなったためです。

食生活と歯肉炎

前項に示した問題は、すべて、現在の食生活が、軟らかくて栄養素に富み、しかも繊維質が少ない食物を中心とするようになってきたことによるものです。さらに最近、ジュースや牛乳などを多量に飲む子どもが増え、液体食への指向性が強まってゆく気配があります。

ジュースをだらだらと飲むことは、以前から歯科医が問題にしていたことです。でも、それは、歯が汚れて、むし歯ができるからという単純な理由からでした。

しかし、問題はそんなに生易しいものではありません。まず、このような食生活では、あごを動かすことが非常に少なくて済みますので、あごの大きさも、口の機能も十分に育ちません。また、甘味飲料を多く、だらだらと飲むようになると、血糖値が下がる暇がなくなり、食欲が起こりません。しっかりとしたもの食べさせよう

としても、食べたいという動機がありません。そして、楽なものを少しだけ、いやいや食べるということになります。そして、こんなに食が細くてはこの子は育たないと、大量の牛乳を飲ませるといふ悪循環が始まります。

甘味飲料の多飲は、また、必要なエネルギーの大半を砂糖の形で摂ることを意味し、残りのエネルギー量だけでは、栄養素のバランスをとることさえ難しくなります。

このように、現代の食生活によって、子どもの口は、さまざまな影響を受けています。歯肉炎やむし歯は、歯の汚れによって起こる病気であり、一方、発育の低下は、あごを十分に使わないことの結果です。根本的な原因は食生活です。歯肉炎は、発育の低下が起こるよりもずっと前に口の中に現れますので、それが、現代食への偏り過ぎを警告する大事な危険信号になっているわけです。

私たちが、子どもたちやお母さんたちを対象に食生活指導を行うときは、甘味飲料や牛乳をあまり飲ませない

こと、飲ませるなら食後にすること、それから、繊維質の多い野菜類をたくさん食べることなどを中心にしてお話しします。お腹を十分に空かせて食欲をおこさせ、繊維質が多い食物をよくかむようになると、初めて歯肉炎は消えてゆきます。いくら一生懸命歯みがきをしても、歯と歯肉とが接する部分の汚れはとれないのですが、生活を改善することできれいになり、歯肉炎が治るのです。逆にいえば、歯肉炎にならないような食生活をしていればあごも育つということです。

一方、歯みがきで歯がきれいになっても、あごの発育にはなんの効果もなく、ピカピカに磨かれた歯が、小さいあごに納まりきれず、歯並びが悪くなっている子どもが、最近とくに目立ちます。

そしゃく器官の初期発達

子どもの口に関して、現在、最も重要と考えられるのは、そしゃく器官の発育の問題です。そして、発育の遅

れを防ぐには、幼い時期での努力だけが有効であり、ある程度年齢が進んでからでは決して取り戻すことはできません。

そしゃく器官の発育のためには、生まれてから永久歯が生え始める前までが大切であり、私たちはこの時期を、あごの初期発達の時期と考えています。この時期は、さらに三つの段階に分けて考えることができます。

表1に示すように、第一段階は哺乳期です。生まれた

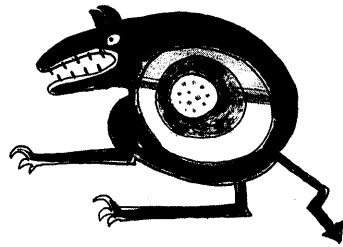


表1

そしゃく器官の初期発達

	第1段階 哺乳期	第2段階 固形食移行期	第3段階 食習慣形成期
時期	生まれてから 乳歯が生え始めるまで	乳歯が生え始めてから 生え終るまで	乳歯が生えそろってから 永久歯が生え始めるまで
発達経過	かむための筋肉の発達 かんでのみこむ行動パ ターンの準備	かんでのみこむ行動パ ターンの完成 普通食への完全な移行	かむ筋肉の一層の発育 そしゃく能力の向上 正しい食生活習慣の完成
注意事項	吸引型哺乳を避ける	液体食化を避ける	甘味飲料の多飲を避ける
努力目標	乳房哺育または そしゃく型乳首の使用	食事中心の食生活の確立 確実になんでも食べられ るように	食事前と食事中に飲物を 飲まない習慣をつける 積極的に繊維質をたべる
失敗すると どうなるか	第2段階での 固形食への移行困難	第3段階における かめない子・のみこめな い子の成立	思春期以後生涯を通じて 口のさまざまな問題に悩 まされる

直後から最初の乳歯が生え始めるまでのこの期間には、二つのことが進行します。ひとつはそしゃくするための筋肉が発育することであり、もうひとつは、かんでのみこむという行動パターンに慣れることです。こうして、固形のを食べるための準備ができることになりま

す。

第二段階は固形食移行期です。乳歯が生え始めてから生え終わるまでの期間は、歯を使ってものをかんで、のみこむという一連の行動が成熟する時期です。この期間の前半は、丁度、離乳期にあたります。私たちは、この時期を積極的に固形食（普通食）になれるための時期と考え、固形食移行期と呼んでいます。

幼稚園に通う時期である第三段階は、食習慣形成期です。乳歯がすべて生え揃い、これまでの自然な食生活を通じて身につけたかんでのみこむという行動パターンに、力強さを加える時期でもあり、また、規則正しい食生活を習慣づける時期でもあります。そして、永久歯が生える頃には、これまでによく使ったあごの骨やかむた

めの筋肉は充分發育し、齒も大きくて頑丈な永久齒に代わるわけです。そして、この初期發達の段階をうまく通過した子どもたちは、よほどのことがない限り、その後成長過程においてつまづくことはないと思います。

幼児の齒科保健

私たちが行う食生活指導の内容は、甘味飲料のコントロールと、野菜類をよくかんで食べることを主体とするものであることについてはすでに述べました。本来は補助手段である歯みがきについては、一切触れないようにしています。それは、歯みがきに自信をもつ母親ほど、食生活の改善に対しての動機づけが難しいことが分かってきたからです。

こういう指導を繰り返しながら長い期間の経過を見ますと、食生活指導の効果が上がるグループ、母親がよく理解していて十分に努力しているのに効果が上がらないグループ、および、母親が理解せず、従って努力がみら

れないグループの三つに分かれます。

さて、幼児教育の段階は、初期發達の第三段階に当たりますので、ここでの努力目標は、食前、食中に飲物を飲まない習慣の確立と、積極的に纖維質を食べることに慣れることです。齒肉炎が起らないことを目印にして、これを実行することは、それほど難しいことではないので、上に述べた最初のグループに関してはなんの問題もなく効果が上がるはずですが。

最後のグループに関しては、例えば幼稚園のような教育の場での指導ですので、ある程度の効果が上がる可能性がありますし、また、どうしても行かないケースは、もはや幼児教育や、健康教育の枠を越えた問題であり、努力の限界と考えざるを得ないことになります。

問題は、母親の真剣な努力にもかかわらず効果が上がらない場合です。その多くは、初期發達過程の第一段階および第二段階に失敗したもので、いわゆる「かめない子・のみこめない子」です。哺乳期には哺乳瓶哺育によって筋肉の發育の機会と、かんでのみこむという行動

パターンを失い、それ故に、固形食移行期にはかんでのみこむ行動パターンを身につけることができなかつたものです。

残念ながら、そして残酷なことです、この子どもたちがキャッチアップして、正常な咀嚼・嚥下能力を獲得する可能性はほとんどありません。しかし、幼児期が最後のチャンスですので、少しでも改善するため、甘味飲料と繊維質という基本を厳格に実行し、また、現在の子どもの能力に合わせる食生活を止め、少しでも子ども能力を広げる努力が必要です。母子一体となって、そして周囲の人たちの協力も得て、頑張つて欲しいのです。いま辛い思いをする方が、将来、生涯にわたつて、口のさまざまな問題に悩まされるよりは、ずっといいと思います。

おわりに

幼児を対象とする歯科保健の中で混乱の原因になって

いるのは、結局、歯みがきが優先か、食生活の改善が先かということです。紙面の都合もあつて、十分な説明はできませんでしたが、この小文が、幼稚園の先生や、お母さんたちの不安を取り除き、それぞれの立場での役割を果たす上で少しでも役立つならば、これほど嬉しいことはありません。そして、子どものおごの健康を取り戻そうという私たちの願いが、多くの方たちの努力によってきつと実現できるものと期待しています。

参考文献

- 一 井上直彦・伊藤学而・亀谷哲也『咬合の小進化と歯科疾患』医歯薬出版社 東京 一九八六
- 二 井上直彦・坂下玲子『赤ちゃんからの歯科保健、子どもと口の未来のために』メデイサイエンス社 東京 一九九二

(元・東京大学助教授)

特集へなおす

な
お
治
る

宮川 明子



東京の中野で開いている私の治療室には、働いている女性の方、妊娠中や授乳中の方、子育ての真ん中のお母さん、子供達がやって来ます。おなかの中にいるときから付き合っている子供達もたくさん来ます。新生児から小学生の子供達です。

ここに来る子供達は、毎日の健康管理をはじめとして発熱、咳、下痢、便秘、夜尿、アレルギー、発育不良、もっと元気になりたい、けが、姿勢が悪

い、などといった日常の健康相談、育児相談、お母さんでは、母乳の問題、不妊、生理痛、生理不順、腰痛、など様々です。

例えば子供が熱を出しますと不安でたまらないお母さんは、「子供が熱を出しています。いろいろな治療をあれもこれもやってみましたがまだ下がりません。他に何かやらなくてはいけないことはありませんか」とオロオロと心配しながら聞いて来ます。

またお母さんの中には、子供が目の前にいるのに、「この子は昨日から咳ばかりしています。このまま喘息になるのではないでしょうか。」と不安そうに聞いて来ます。

お母さんがオロオロしたり、いろいろな特別扱いをしますと、子供は、お母さんがこんなに心配しているのだからきっと自分は重大な病気に違いないと確信します。その確信が体を悪くする方向に向かわせます。そして子供はどんどん本当の病気になって行くのです。私達はまず「お母さんが子供の生命力を信じてゆったりと呼吸をしてください。」といいます。まずお母さんの心配の心を取り除き、安心させるということがとても大切な私達の仕事です。

私達は、まず病気の考え方から指導します。私達は物が壊れた時には、その壊れた所が治るまでいろいろな方法で治そうとします。でも私達人間は生きています。そして誰でも体が無理をしたり、食べ過ぎて胃腸に負担がかかったり、何か心配なことがあ

ると、熱を出したり、食欲がなくなったり、下痢をしたりといったことで体をもとに戻そう、治そうとバランスをとる能力を持っています。病気の中には、自分で体のアンバランスを治そうとしている積極的な意味の症状もあるのです。それが私達の持っている自然な治癒能力です。

生きる勢いが強いほど熱も高くできます。「お熱は何度出たの、そう、もうすこし高い熱が出たら体はもっとすっきりしたのね、残念でしたね。この次はもっと頑張って高いお熱がでるといいですね。」

「自分で病気を乗り越えると、もっと元気にもっと大きくなりますよ。」という子子供はなんだか分かんなくても、安心します。そして体は治る方向に向かいます。その大切な自然の働きを、病気の原因も考えずに、熱が出たらすぐ下げるとか、すぐ下痢を止めるとか、そういった不自然なことをいつもしていると、体は自分でバランスがとれなくなり、いつまでも本当には治り切らずぐずぐずとして、段々弱

くなりませす。

心も同じです。もちろん、体が自然な働きをして
いるということがとても大切で、何かの都合で自分
の体がうまく調節を取るように働いてくれない場合
には、少し手助けをして、生きる勢いをつけてあげ
る。それが治療だと思っています。

特に子供の場合には、子供には子供独特の心の働
き、体の働きがあります。

私達は子供が風邪といった症状を訴えて来たとき、その風邪の症状を見ると同時にその子供がどの
ような成長の過程にあるのかを感じ取ります。その
子供がどんな呼吸をしているのかを見ます。おなか
の底からゆったりとした呼吸をしているのか、それ
とも浅い呼吸なのか。ゆったりとした呼吸はその子
供がこの世界に安心感をもっていることを表してい
ます。同時に深い呼吸は体内部の調和を示していま
す。体の弾力、おなかの力、栄養状態、リズムにも
注意を向けます。眠りと目覚めのリズムは生活の安

定を、おなかの力は基礎的な体力状況を示していま
す。手足を自由に伸ばせるといふことも大切な事
です。そして子供の今ある症状を軽くする、無くす、
という考え方だけではなく、その子供の体の発育が
自然な状態なのか、楽に呼吸ができる生活状態かど
うか、生活のリズムが正しく、自然に育っているか
どうかをご両親と話し合います。

自然に育っている子供は、生きる勢いをもってい
ます。その生きる勢いは、体の異常を感じとり、自
分で病気を乗り越えることでもうひとつ大きくなろ
うとします。この勢いは成長するプロセスでも
大切な事です。わたしたちは、子供の生命力を信頼
して、なるべく、特別なことをしないで、見守りま
す。子供を囲む回りの大人達が病気のもっている意
味を理解し、病気を乗り越えることは成長につなが
るのだという自然の力への信頼を子供に感じさせる
時、子供が自分の力で病気を乗り越えることでもつ
と大きくなれるのだ、丈夫になれるのだと感じた

時、子供は自分自身の力で治って行きます。子供の中でたくましい力が育つのです。また、体と心は密接につながっていますから、体のほうに働きかけることによって、心の状態も変えて行くことができます。

このことは大人にもいえることです。大人はもう

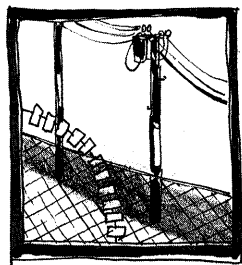
少し子供よりも複雑で問題はいろいろ入り組んでいますが、基本的にその事の心の方向が、前向きになり、生きる勢いがつき、自分の体が治ると確信したとき、自分の力で治って行くのです。

松が丘治療室マザーズオフィス主宰
東京シユタイナーシユール教員

本を直す

本は利用され続ける文化財

久芳 正和



「本」というのは、傷んだからといっても捨て難いもので、それぞれの本に特別な想い出があり愛着

を感じてしまうのは、私だけなのだろうか？

おじさんと呼ばれる齢になっても、本棚の隅に置

き去りにされたボロボロになった革表紙の辞書や、色褪せた絵本があったりする。

そんな本を数十年ぶりに手に取ってみると、一瞬の内に当時の自分にもどれたりするから不思議なものだ。

多くの人たちは、大切な本が壊れて表紙がブラブラに外れそうになったり、ページが抜けたままの状態で我慢しながら使ったり、一方では応急手当にセロファンテープなどを駆使して破れたページをつなぎ合わせたり工夫している。買い替えの可能な本ならば、すぐにでも書店に注文するだろうし、それがだめなら諦めるしかない。

個人レベルならば、このような処置で許されるのだろうか、図書館ともなるとそれも行かなくなる。まして私が仕事をしている国立国会図書館では、全ての資料を“永久保存”する納本図書館としての使命を担っていることもあり、資料の状態にかかわらず常に利用可能な状態にしておくことが要求されてい

る。

本には、文字が伝える“情報”と紙やインクその他の材料から構成されている“物”という側面もある。

図書館を利用する人たちは、情報のみを必要とする人、情報プラス物、あるいは物としてのみの本を必要とする人などまちまちである。

私たち図書館資料の保存に携わる人間にとっては、それら全ての人たちの要求に可能な限り答える責任があるのだろう。とは言っても限られた人員・予算のなかで、図書約五百万冊を相手にすることは至難の技なのである。

本は利用されればされる程傷むに違いないのだろう。しかし貴重な本だからといって施錠した本箱に仕舞い込み、利用に供されなければ長持ちはずも折角の本が役立たずに死蔵してしまう。

資料の“利用と保存”は相反する概念として論じられることが多い。しかし、保存とは単に守るとい

う消極的な行動ではなく、現在及び将来に向けて少しでも長く人々に資料の利用を保証し続けるための前提条件であり、積極的な行動であると捉えられるべきだと思っている。

保存のための処置には、資料が傷んだり又は資料の散逸を防ぐために前もって行われる事前処置（製本）と、一時的な処置として保存箱や保存ホルダーと称される弱アルカリ性のボードで作製された容器に収納し、主に外部からの劣化要因（光・ホコリ・温湿度など）から資料を保護する段階的処置、そして損傷した後に行われる修理・修復、再製本などがある。

ここでは特に、私が日頃行っている本の修理修復について触れてみたい。

対象とする資料の多くは、十七世紀～二十世紀初頭ぐらいまでの革装丁された洋装本で、表装材料の多くは山羊又は子牛の革が使用され、その上に金箔で装丁を施された堅牢な本が多く、昨今の無縁綴じ

（接着剤製本）された表紙と本体とが見返紙の部分だけで接続している本と比べると製本構造上の違いには大きなものがある。

最近では、貴重な資料を修理修復する時には、

“非破壊” “可逆性” “保存記録” という三原則がある。

①非破壊とは、資料が元々持っているオリジナルな形態・材料はもちろんのこと製本構造なども変えてはならないということ。

②可逆性とは、修理修復に当たって使用される材料あるいは処置などが、後日いつでも元の状態にもとすことが可能であるということ。

③保存記録とは、オリジナル資料の物としての記録と、処置を施した過程での詳細な作業記録（使用した材料も含む）をとるということ。

基本的には以上の事柄を念頭に置きながら作業をしている。ボロボロになった本でも、再び利用可能にするために様々な作業が行われる。虫損害に遇っ

た箇所は一つ一つの穴を和紙を用いて繕ったり、劣化して赤茶けた革を慎重に剝がし、新しい革で本を包み直した後、再びその上にオリジナルの革をもどすことにより、ある程度のオリジナル性も保つことができ、資料の利用も可能になる。

紛失している部分、例えば花ぎれ（本の背側の天と地の部分にある布片）などは、編み直したりもするが、こうした新たに創作する部分は最小限にとどめていく。それは、後世の人たちに誤解を生じさせ

てはならないという配慮からだ。

以上のように、私たちは資料のもつオリジナル리티を最大限に尊重し、決して冒険的な無理な処置をせず、しかも利用に耐えられるような本の直し方を常に心掛けていく。

形有る物は必ずいつかは消滅するのだろうが、私たちの仕事はそのいつかを一日でも先に伸ばす手助けになればと思っている。

（国立国会図書館）

おもちゃを直す

松尾 達也

私がボランティアとしておもちゃの修理をはじめからもう十五年が経ってしまいました。もちろん、私一人だけでこんな仕事をしてきた訳ではありません。私と同じように、電機、機械、工作、などにたいへん興味があり、自分の仕事とは関係があたりなかつたり、つまり、趣味としての興味です。そんな人たちが約二十人も仲間としています。

子供の頃には、今ほどには多くのおもちゃがあった訳ではありませんし、また、あまり裕福ではなかったので、ほしいおもちゃを買ってもらえなかったでもありませんでした。父はいくつもの手作りのおもちゃを作ってくれました。木材の切れ端や古い箒の柄からおもちゃができていくのを楽しみに見ていた記憶があります。今日では「手作りのおもちゃ」としてものめずらしい展示をしたり、作ってみせているような類のものでした。そんな父には「おまえはおもちゃを壊してばかりいて……」と何

度も叱られました。

私にとって大事な宝物には違いないのですが、その頃は大抵はブリキのゼンマイ式おもちゃだったので、どうしても動くのか、どんな作り方になっているのか、どうしても知りたくて開けてしまったのですが、もとどおりにはならなかった、というわけです。このようなどんな仕組みになっているのか知りたい、という気持ちはその後もずっと続いています。

中学の頃には鉱石ラジオの組み立てを始めていました。同時に生物や化学の実験道具、(試験管、ガラスバーナー、いろいろな化学薬品、プラスチック、ビーカー、……といったもの)も揃えていました。その後のコースは、化学に関係ある道を歩いて今日に至っていますが、趣味としての機械、電気は、とうとうおもちゃの病院になってしまいました。今は、子供の頃に壊した幾つものおもちゃを思い出しながらその入れ合わせに修理をしている、というわけ

す。

昭和五二年四月に開設された目黒区の「おもちゃの病院」（目黒区消費者センター内）にボランティアとして参加しました。また、中野区にある「おもちゃ美術館」（中野区新井二丁目、芸術教育研究所）でも四年前から同じくボランティアとしておもちゃの病院のお手伝いをさせていただいています。そのほか、各地の行政機関や民間団体などのお手伝いに出張もします。忙しいときには一日で三十個以上もの修理をこなさなければならないときもあり、目の回る忙しさです。これまでに手がけたおもちゃの数は全体でほぼ二万件にもなっています。

子供たちにとってはおもちゃは自分の宝物です。

母親、まわりの大人たちが思っている何倍もの大事さをもったものだと思います。壊れてうまく動かないことはどんなに残念なことかしれません。はじめで持ってきたこわれたおもちゃをおそろおそろだしてみたところ、幸いにも、とても簡単な故障だった



のであつという間に修理がすみ、元どおり動きだしたのを見て笑顔がこぼれる。といったときに感じる満足感は何事にも勝るものです。自分自身にとっても気持ちのいいものです。

私にとっては、どうも、まともに動く機械類はそ

れほど興味を引きません。むしろ、こわれてまとも
に動かないもののほうが興味をそそるのです。どこ
がどうなって調子が悪いのか、どうすれば元どおり
になるのか、それには何をどうすればいいのか、ど
んな部品が必要か、分解するのはどうするか、とい
うようなことを考えるのはいい頭の体操になりま
す。おもちゃの修理も全くこれと同じです。時計、

ラジオ、テレビ、洗濯機、アイロン、ミシン、など
の家庭用電気製品などのほうが本当は修理をしたい
のですが、今はそんなことをさせてくれる場所は見
つかりません。それに、こうした品物はメーカーの
製造責任や事故責任も関係してくるのでなかなか複
雑な要素を含んでいます。おもちゃでは、これに比
べると構造も比較的簡単ですし、修理もしやすいも
のがほとんどですから扱いやすいかもしれません。

いま扱っているおもちゃは小学生までの子供を対
象にしたおもちゃがほとんどですが、それでもなか
なか複雑な構造のおもちゃがあります。子供たちに

大変な人気のあるテレビゲームは、見たところはお
もちゃとしてのすがたですが、その中身は全く大き
いコンピュータと同じ構造をしているばかりか、
使っているパーツも精密な繊細なものなのです。I
CやLSIといったハイテク製品をふんだんに使っ
た回路が組み込まれたおもちゃがどんどん増えてき
ているのです。勿論、日本製ばかりではありません
。アメリカ、イギリス、フランス、香港、中国、
韓国、などたいへん国際色豊かです。これは、日本
国内で売られているものも勿論あるのですが、海外
旅行のおみやげとして持ち帰られたものが多くなっ
てきています。

十五年まえにおもちゃの病院を始めた頃からしば
らくは、ラジオコントロールの自動車の来ない日は
なかったくらいいろいろ種類のラジオコン車を持ち
込まれました。そのころは、まだまだ、技術的にも
未熟だったので、修理の方法もうまく理解していな
いまま手探りでやっていました。それから、みんな

で勉強会を何回か開いて修理技術を確立しました。必要な機械、道具も自作しました。どこにも市販していないもので、いまでも重宝しています。しかし、最近は、テレビゲームの人氣に押されてか、うんとその数が減ってしまいました。

故障原因の中で一番簡単なものは、電池ぎれです。古い弱った電池と入れ換えて動かないと持ち込まれたものです。新しい電池に入れ換えればすぐに動き出します。もし、動かなくなったらず、電池を取り替えてみてください。家庭ではその頃は簡単に電池のあるないを測れるものが手に入らなかったのです。いまでは、やすいものなら二〇〇〜三〇〇円で電気店で手にはいります。いろんな電池が測れる電池テスターは三〇〇円前後の値段で市販されています。でも、いまでも電池切れが故障として持ち込まれるのは少ないとはいえません。できれば、電池の測れるものを一つ手元にもっているとたいへん重宝します。



▶ おもちゃの病院で診察中の筆者

おもちゃを使わないときには電池はおもちゃから出しておいてください。ご承知のように電池は古くなると中から液が漏れだして部品をぼろぼろに腐らせてしまいます。電池をいれたまましまい込んで、ある時だしてみたら中がぼろぼろになっていた、という故障も結構あります。

こわれたおもちゃの部品は捨てないでとっておいて、修理の時には一緒に持ってきてください。部品が無いために形や、作用が分からなくて修理にとても手間取ったり、修理が出来ないことがあります。

なるべく、自分では修理をしない方がいいとおもいます。分解はしたかどうにもならなくて、そのまま持つてこられるのはいいのですが元の状態が分からなくて、大きなバズルとのとくみあいになってしまいます。時間を掛ければ出来ないわけではありませんが、掛ける労力は甚大です。

ぬいぐるみの動物達の中には中につめものだけが入っていて破けたり、穴が空いていたりするものが

ありますが、これは、おかあさんに修理をお願いしたいのです。ちょっとした針仕事くらいはご家庭で済ませてください。

最近のおもちゃはその素材がプラスチックで出来ているものが多いので、見た目はきれいですが、こわれるとなかなかもとのようには修理できない場合が多いのです。大きく壊れたときや大事な部分の欠けたものなどは元のように出来ない場合があります。そのような場合は寿命と考えていただいた方がいいとおもいます。

昨年の五月で三十七年間勤めた会社を定年退職いたしました。十五年間毎週日曜日のボランティア活動としてつづけてきたおもちゃの病院勤めは、今後も体力の続く限り辞めないでいたいと思っています。子供の頃のお医者さんごっここの夢が実現したのですからこんなすばらしい事はないのではないのでしょうか。

(おもちゃの病院医師)

なおす・なおる

田中三保子



人が人をなおすということはどういうことだろうか。保育の現場から考えてみようと思う。

なおす、というときには、すでにそのむこうに、あるべき姿や望ましい姿が想定されているように思われる。それを欠いていたり、そこから逸脱しているようなばあいには、あるべき方向へ導くことを、なおすというのであろうか。

私が、日ごろ保育の中でなおしたいと思うのはどんなときか、改めて考えてみると、子どもが、ハサ

ミを持ったまま歩いたり、食事中頬ばったまましゃべったりしているときなどのようである。それらはいいてい日常の生活習慣であって、今まで知らなかったことを教えたり気づかせたりすれば、比較的直りやすい。望ましいと思われる状態がはっきりして、直すことが子どもの心の中にまで響かない事柄だからであろうか。私の方でも心安く働きかけることができる。

外からは同じようにみえることであっても、その

行為が子どもの心の内奥にかかわっていると感じられるときには、直すことは容易ではなくなる。なぜそうするのか、そうせざるを得ないのか、子どもの気持ちになって考えてみても、なかなか答えはみつからない。心の中から何かに突きあげられてそうするのであって、子ども自身にも理由は分らないにちがいない。

事例をあげてみる。K子はハサミをしょっちゅう持って歩く。またクラスのハサミを自分の引出しにしまいこむ。危ないからハサミを持って歩かないように、みんなのものだから一人じめしないように、という指導だけではK子の行動は変わっていかない。K子はハサミに執着しているのである。ひとつの行為だけにこだわることなく、行動全体からK子の本当の気持ちを推しはかり、それを受けとめていくことが大切なのではないか。集団の中では、どんな行為でも全て認めるというわけにはいかないけれども、行為の奥にあるK子の気持ちはそのままに受

け入れ、応えてあげたいと思う。ハサミにこだわらなくなることをめざすのではなく、K子がK子らしく生きられるように、気持ちについていきながら、共に探っていきたい。

三歳の二学期。K子は今でもときおり、刃先を手のひらに握ってではあるけれど、ハサミを持ち歩く。多分この先も、私はK子の気持ちに添いながら対応を工夫していくことになるのであろう。

かつて私は臨床心理学を志したことがある。大学の心理相談室で幼児のプレイセラピーを担当することになった。ことばがでない、友だちと遊べないということで母親に連れられてくる子どもたちは、おもちゃがたくさんあるプレイルームにはいってもほとんど動きだせず、じっとしたままのことが多かった。仕方なく、私も黙って傍らにしゃがみこむ。この子がどうしてしゃべれないのか、どうして遊べないのかは、二人きりのこの場からははかりようなかった。けれども一緒にじっとしていると、その子

の細かな気持ちの変化が伝わってくるような気がした。区切られた一時間の中で、わずかながらも子どもの気持ちは揺れ動く。それをそのままに受けとめ、つきあっていく。私がついていくのがわかると、子どもの心の揺れはだんだん大きくなっていくようであった。

何回か回を重ねるうち、子どもたちはたいいてい自分から動きだすようになる。おもちゃや私に対してはつきりと反応するようになり、心の中で何かが大きく動きだすのが伝わってくるようになる。そうして、私と二人だけの世界では相変わらずことばは発しないけれど、友だちと遊べるようになったかどうかはわからないけれど、その子が自分から動いたり、働きかけたりできるようになってきたことが、はつきりと感じられるようになってくる。「治った」として治療が打ちきられるのはこの頃である。子どもたちは自分たちの力で治っていった。私にできたのは、ただ子どもたちについていくことだけ

であった。

改めて振り返ってみると、保育者となった今も、「治療」と「教育」と、その目的は変わっても、私の子どもたちとかかわる基本的な姿勢はほとんど変わっていないように思う。

子どもは自分自身の内に力を秘めているといつも思う。自分を見守り支えてくれる人がいれば、いつか必ずその力を発揮し、自身の危機を乗り越えることができる。自分自身の力を使って「なおす」ことができるのではないか。時を経て、それまでを振り返り、子どもの行動が変容していると考えられるときに、外側からその子を表現して「なおった」というのだと思う。保育者として、子どもについていこうと一所懸命になっているときには、子どもはもちろん、保育者自身にもそれと自覚されていないのではあるまいか。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

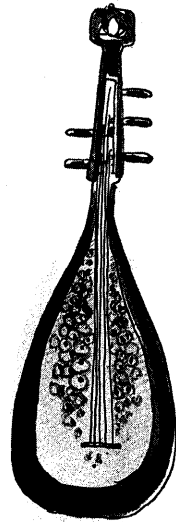
土器の復元

部屋には幾つもの長机が並べてあり、それらの上には縄文土器の破片が隅々まで広げられている。机の間を整理箱を抱えた女性達が行ったり来たりしている。整理箱には彼女達に集められた同一個体の土器片が入っている。

誰かが「やったあ。ついたついた。今日十点めよ」と歓声をあげる。別の一人は壁際の棚に並んだ整理箱を次々に引き出しては「この辺にこの土器が

あったはずなのに」とぶつぶつ言っている。「あら、この土器はあっちの棚よ」と人が捜している土器に首を突っ込む人がいる。

これは私がある遺物整理室での土器接合作業のひとつまである。遺物整理の中で最も楽しくおもしろくできるのがこの接合と次の復元の作業である。私も皆の歓声に釣られて本務そっちのけで熱中してしまふ始末である。



吉岡 恭平

土器の形状（プロポジション）、赤っぽいとか黒っぽいとかの色具合、縄目文様や幾何学文様の種類などを手掛かりに同一個体を集め、割れ口の形状や文様の連続性から接合する箇所を捜索するのである。割れの形状に沿ってピタッと接合した時の満足感はずグソーパーズルの比ではない。特に人が半ば諦めた土器に挑戦し接合した時の気分は格別のものである。

この接合のおもしろみを覚えると土器を記憶する容量が増大するようで、主要な土器をほとんど（百個体ほど）記憶してしまう人が何人もいるようである。

発掘調査は野外調査が終了すればそれでおしまいたいと思っている人が多いようであるが、実はそうではなく、次に室内での遺物整理が待ち受けているのである。

その行程は土器の場合でみると、水洗い↓注記（出土地点などを土器片の裏に書く）↓接合↓復元

↓実測（土器の立面図を取る）↓写真撮影↓報告書刊行となる。

接合の次に来る行程が復元である。この作業ももしろいのであるが、なかなか悔れない。土器の残り具合によって正立させたり倒立させたりして組み立てて行く。接着剤は普通のセメダインである。組み立て可能な土器とはいえ隙間だらけでアクロバチックに接合しなければならぬことが多い。

復元に使う道具はいろいろである。骨折した時に使うギプス用のキャスト材（細かい格子状のもの）、これを隙間を埋めるための芯材とし、それにシャモット（耐火レンガの材料の粉）とエポキシ樹脂を混ぜ粘土状にしたものを充填して補強して行くのである。（私の所では石膏よりも取り扱いが楽であるのでこの方法が定着したが、全国的には石膏が主流であろう。）

復元の行程には段階が二つ存在する。ひとつめは実測図を取り易いようにするための復元である。こ

の場合には必要最小限の復元であり、完形品にはしないことがポイントである。それは実測図を取るという行程が土器を最もよく観察しなければならぬ行程だからである。前述したように組み立てられた土器はいたる所に欠落箇所が存在する。私たちは実測する際にその隙間から内部を覗きこんだり、ルーペで土器の表面や断面を観察して、胎土の状況や成形時の粘土紐の状態、器面の調整の方法、縄文の種類、文様の施文方法・順序、煮こぼれの痕跡、などの様々な情報を引き出すのである。したがって過度の復元はむしろ土器観察の妨げになるのである。とくに壺などは完形にしてしまうと内部の観察が全く不可能になる。

ふたつめは展示などのために見栄えを良くする段階である。博物館に展示された土器を完形品と思っ
て見ていたら実は数点の土器片から大復元をしたも

のだったということがたまにある。

このような復元の方法に私は疑問を感じている。彩色する場合でもどこまでが本物であり、どこからが復元であるか、はっきりと判るようにすべきであろう。欠落部分の復元はあくまでも担当者のその土器に対する理解にもとづくものであるからこそ、見る側がそのことを認識し観察できることが望ましいと考えるからである。

土器の復元は、あくまで元の土器の状態に近づけた形でいろいろな情報を収集しようとするものである。「なこそう」としても、「なおせない」「なおし」ともいえようか。ただし、製作され、不要になって廃棄されたという「土器の一生」を垣間見ることができるのである。

(仙台市教育委員会)

自分の健康は自分の手で

自然治癒力を高める

自分から治るといふこと

堤 喜久雄

「健康第一」とはだれもが口にする言葉です。

様々な健康法や治療法、健康食品が次々とブームとして現れるなか、本当に自分の身体に合った健康法をお探しの方も多いようです。

我が国は、世界有数の長寿国と言われるだけあって、病気やケガの治療施設も他国より充実しているようです。

しかし一方では、何となく肩がこる、何となく気

が晴れない、などといった半健康体の方が何と多いことでしょう。

なかには、何となく調子が悪い、何となく痛いのが習慣になってしまい、治そうと考えることすらしない方もいらっしゃるのではないのでしょうか。

半健康体の方には、「半分は健康だからよい」と考えている方も多いようですが、しかし、半健康体は病体の一歩手前と考えるべきでしょう。

また、そのような考えの方にかぎって、病気になるたら薬を飲んで治せばよい、治療に行けばよいと考えがちのようですが、自分の健康は他人まかせだけではいけません。自分の手で予防し、そして健康に導いていくことも忘れてはいけません。

中国五千年の歴史と経験の知恵から生まれた東洋医学は、鍼灸治療が黄河流域から、漢方医学が揚子江流域から日本に伝わってきました。

東洋医学について、体系化されたものとしては、一番古いのが「皇帝内経」でしょう。紀元前二千七百年ごろに書かれたものとされています。

その中にも「病気はその前兆の早い時期に治すこと、そして日頃から健康体に維持していくことが大切である」とされています。

東洋医学の考え方では、「気と血」の流れ道とされる経絡の流れを促進させて、人間の潜在能力である人間が本来持つ自力で健康体に戻す力「自然治癒力」を高めることを重視してゐるのです。

「気」とはごく簡単に表現すれば「生命を維持して動かしていくためのエネルギー」「元気の気」と言えるでしょう。

「病は気から」と昔から言われるように、気が病になると書いて病気なのです。

心が安定して気が全身に満ちて流れていれば、身体も健康になると考えられています。

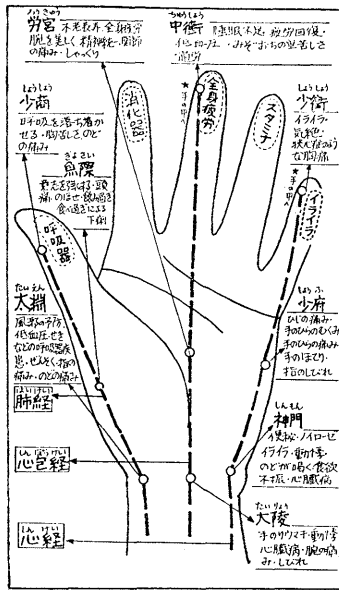
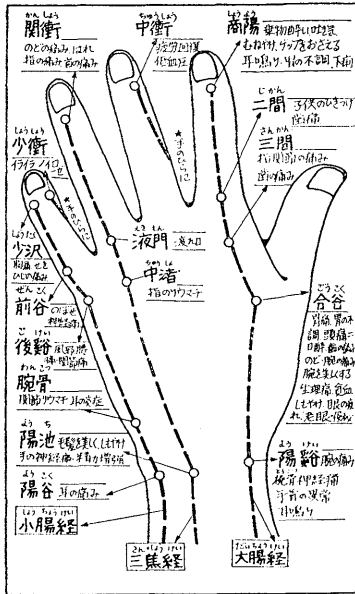
経絡の流れが滞りやすいところがツボと言われ、全身に三六五あるといわれています。

その流れがツボで滞ってしまうと、痛みやコリ、あるいは病気が生じるとも考えられています。

ツボを中心に、常にその流れをよくしておくことが、自然治癒力を高めることにもつながるとされています。

ツボを軽く指でもみほぐしたり、押えながら動かしたり、テレビを見ながらでも、朝起きたときの布団の上でもできるはずです。

あまり早急に、多大な効果を期待せずに、毎日ほ



んの少しずつでも習慣にして、繰り返し行うよう心掛けることが大切です。

そういえば肩凝りが楽になった気がする、そういえば今年の冬はカゼで寝込むことなしに過ごせた、といったよい傾向が生まれれば上々、というくらい気楽に考えましょう。



中国では、健康に悪い気のことを、「邪氣」と表現します。身体に抵抗力がないために邪氣が体内に入り込み、体調を崩したのだと反省し、運動したり、食事内容を検討したりしながら、自分で治していくのです。

現在でも、風邪と書いてカゼと読むのもこの考えかたから来ているのでしょうか。

無病息災であることはだれもが願うことですが、一病息災という表現もあります。病を経験することによって改めて健康のありがたさを知り、治していくための心構えや対策を考えるよい機会にもなるからです。

対策と言っても難しく考える必要はありません。

例えば、朝食、昼食、夕食は決まった時間にきちんと取る、早寝早起き七時間程度の睡眠をとる、姿勢をよくする、週二回程度適度な運動をする、暴飲暴食を慎む、標準体重を維持するなど、思いつくだけでもけっこうあるものです。

昔から「手を動かしている人は健康で長生きする」と言われます。経絡の流れは十二本全身を流れていますが、手の指先の爪の生え際のツボからそのうち六本スタートし、全身の十二本へと流れていくのです。

手には全身の健康と深い関係があるツボが集中しそのうえ三十以上の関節と五十以上の筋肉が関連し、また、手と脳は百万本以上もの神経繊維で結ばれています。指、手は、全身そして脳とも密接な関係にあるのです。

指先を軽くもみほぐしたり、クルミを手のひらで一個挟み、転がして軽く刺激するだけでも、手を動かさないよりはずっとよいでしょう。

そのときには姿勢をよくし、呼吸は鼻からゆっくり吸い、口からゆっくりと吐き切るように行います。

経絡の名前には肺経、大腸経、胃経、脾経、心経、小腸経、膀胱経、腎経、胆経、などとあるよう

に手からの流れは内蔵諸器官とも関係が深いので
 す。もちろん一度や二度、刺激をしただけで、内蔵
 関係の病気まで治るわけではありません。軽く毎日
 繰り返すことにより、例えば、前より食欲がわき、
 食事が楽しみになった、便通が前よりよくなったよ
 うだ、といったよい傾向が自覚できるようになれ
 ば、自然治癒力が高まってきたと考えるてもよいで



しょう。

身体の各部位のツボを、手のひらでくるみを転がしながら刺激していれば、「気・血エネルギー」の流れは少なからず促進されていきます。

人の顔が少しずつ異なるように、ツボの位置も少しずつ異なりますので正確なツボを探すのは自分では難しいことです。そこでクルミを手のひらで転がすようにしてツボを「多点刺激」していけば効率よく刺激していくことができます。

ツボは身体の左右対称にありますので、右手左手で行いましょう。

運悪く腰痛に悩むことになってしまったとしても常日頃から腰の流れを促進していくように心掛け、腰のツボでも多点刺激していれば、自然治癒力は高まり、回復も早まることもあるでしょう。

(指さき健康法協会会長)

保育への視座 (8)

—— 若い保育者の方々へ ——

河邊 杲

幼児が友だちや保育者に対して憤^{むね}るときや無理難題のようなことをなげかけて来たりするとき、これをひとつの「自己表現」として受けとめることができているだろうか。

K 幼稚園の四歳児クラスで登園早々にA子、Y子、M子、E子、MH子女児五人が製作コーナーのところに集まり何か作っている

など思っていると、突然MH子が大きな声で泣き出した。その側でY子がMH子の顔をのぞきこみながら「ね、いいでしょう順番やで」とくりかえしていた。

担任が「どうしたの？」と声をかけてみるとY子が「あのね、MHちゃんが、三番いやっていうの」

担任「何の順番なの」

M子「あのね、Aちゃんに魔法のステッキ
作ってもらおう順番なの」

Y子「きのうMHちゃんが一番やったで、
きょうは三番になったの」

E子「私きょう一番なの」

Y子「私が二番でMHちゃん三番でMちゃん
が四番んだけどMHちゃんいややってい
うの」

担任「毎日順番決まってるの」

Y子「うん交替っこしてるんや」

担任「魔法のステッキってAちゃんに作って
もらわないとできないの？」

Y子、E子、「うん」

(どんなステッキかと担任が見ると割ばしの
先に色紙の丸形がつけてあって、その中に何
やらマークらしきものがフェルトペンで書い
てあった)

担任、「これでしょ。みんな時々自分一人

で作ってるじゃないの」

Y子「だってね、ここんところが難しいも
ん、Aちゃん上手やで、作ってもらおうの」

(ここんところは色紙に書いたマークのよ
うなところを指している。担任は何でも好き
なものを書けばよいのに、どうしてむずかし
いと言うのかなと思った)

担任「だってこれぐらいだったらYちゃんた
ち、絵が上手やで書けるでしょ」

E子「Aちゃん上手やもんね」

と仲間に同意を求めるように言う。このよう
なやりとりをしている間にMH子の涙も消え
ていたので、

担任「そんなにAちゃんにやってもらいたい
のなら上手に順番守って作ってもらって。

先生は自分でかいたって上手に書けると思
うんだけどな」

と、解決ともならないようなことばかけをし

て、その場を離れてしまわれたのである。

*

その日の担任の省察によると、最近になってA子に作ってもらうため順番に待つ姿が見られて担任は気にされていた。ちょうどMH子が泣いたので、よい機会と思いい声をかけてみられたのだが、担任のことばかけは子どもたちの耳に入らなかったようだった。担任としては、A子の表現のすばらしさを認めつつも、まわりの子どもたちがそれに誘発されて、“自分でもやってみよう”という姿勢になってくれればというねがいをもたれていたのだが、この子どもたちはA子に作ってもらうことで満足感をもち、それぞれが自分でやってみようという意欲がなかなか持てないことについてどうすればよいのかを指導の課題として持たれていたように思われる。

この保育の事実と担任の省察等から三つのことについて考えてみたい。

まず第一は保育の事実の中で子どもたちの活動状況をどう保育者がとらえるか、ということであり、日頃保育者が心を一番使われるところであろう。この日の保育でも保育担任者が省察で問題にされている通り、A子に依存して自分たちの力で表現しようとしていない四人の子どもたちの活動についてなんとかならないものかという課題をもたれたことは保育者の一つの見方として理解できる。またこうした見方も多くの他の保育者に支持される見方であるかも知れない。しかしよくこのことについて考えてみると、それは評価的な見方であり、こうした見方で子どもに接することは否定的な態度で子どもに臨むことにもつながる。

さらにこうした評価的・否定的な保育の姿

勢でいると、いま・ここに起きているあるがままの事実が見えてこない。また見ようと努めないことにもなる。つまりひとりひとりの子どもの動きが新鮮に保育者の眼にうつらないのである。この場面で言うと、担任教師が指導（援助）しなくては子どもたちと出会われたのはMH子が「三番はいやや」と泣いていてY子がこれを一生懸命になだめている場面であるが、このMH子の心持ちやこれをなだめていたY子の心持ちと、この二人の関係については、何もふれられていないことである。

担任の先生の指導しなくてはと思われている内容については子どもとの対話の中によく伺い知ることができるが、そこに起きている子どもも相互の人間関係が見えていないように思われる。

第二は、担任が気にされているA子とそれ

をとりまく四人の子どもたちとの関係についてであるが、担任の眼にはA子に依存的であり、とりまく四人の自発性・独自性・創造性の面が働いていないことを少し視点をかえてみると、二年保育の四歳児の二学期の中期頃、A子に対して私を助けてくれる人、力を貸してくれて安心できる人という思いが生じつつあり、A子自身もまわりの四人に助けあげられる自信や皆から信頼されようとしていることを確認しつつあり、そこにそれぞれ存在感を感じつつあることも感じとれる。またA子をとりまく四人の相互が、かいてもらうという欲求をめぐる「順番」という新しい秩序づくりを発見し「交替してやっているのだ」と誇らしげに担任に報告しているなど、また、子どもたちがつくりつつ学びつつある人間関係がここに見えていることは見逃すことができない。

第三は、このように子どももの活動を見ると
いうことは、従来から保育方法で考えられて
来た、担任教師が困ったことと見たところで
これをどうすればよいかというような、如何
にも操作主義的とも言える態度で保育に臨む
のではなく、ひとりひとりの行為を自己表現
として受けとめ、このメッセージを如何に受
けとっていくかという関係のとり方（かわ
り方）において、保育を实践していかなくて
はならないということである。「三番いや

や」という泣きながら憤^いっている子どもや、
その気持ちにより添うようにこれを一生懸命
なだめている子どももの活動が一つの自己表現
と見えてくれば、当然その心持ちに即してレ
スポンス (Response) しなければならない
はずである。

保育をこうした表現とその理解、及びその
うけとめといった関係の面から見直してみよ
う。

(元・洗足学園短期大学)



保育所の窓からのメッセージ

浪川美知子

学校の週五日制がスタートした九月の新聞テレビは、各地での様々なイベント紹介で賑わっていました。子ども達の土休の日は、何か特別な事でも用意しないと、とでもいうようなムードでしたが、私は、単純に、親の手元にもう一日多く戻ってくるだけなのだから、休日のペースでのんびり家庭で過ごす、と気楽に考えていたので、マスコミの反応には少々驚きでした。週五日制実施の為、修学旅行が無くなってがっかりしている等の話は、ニュースになるでしょう。しわ寄せの出る形でしかこなせないカリキュラムの検討とか、他様々な論議を呼び考え合う材料を提供しているかもしれません。学校週五日制に関しては、このマスコミの報道よりは、父母グループなどの、地域の子ども達の教育を見つめているグループのミニコミ紙の方が、より実態を把握しているし、お祭り騒ぎにせず、冷静な分析がされていました。

確かに、実施前は、多かれ少なかれ、各家庭、各地域に、戸惑いがあったらうと思います。この時の

「戸惑い」は、何か、と考えてみると、他者に任せていた教育を、親の手に委ねられた時の戸惑いではなかったか、と思えました。（又は、各家庭の受け皿としての地域に委ねられた時の、とも言い換えられるもの）

私自身も、今年度の夏休みに、似たような体験をしました。幼児期までは、夏の遊びを大人の都合の良い日程で計画する程度でも、結構楽しめたのですが、小学校中学年になり、娘なりに選択の目も育ってきているし、大人にも、日頃伝えられないメッセージをこのチャンスに、何か伝えることができたらいいな、という欲も出てくるし、でも、一体どうやって、何を娘とすればいいのか、全く自信がありませんでした。この時、自分が仕事で忙しい事を口実に、いかに学校や学童保育に、教育という分野を依拠していたのだろうか、という事に気付かされたのでした。私が親だったから私でしかない教育をするラッキーチャンスが、この夏休みだ、と思いたち、戸惑いは消えました。意気

込み次第でも状況は、違ってくるものです。

私は、何でもできる能力の持ち主ではありませんので、一人で全てをやり切ろう等と無理しない事にしました。苦手な分野は、行政の企画等を利用させてもらったりもしました。

私の故郷に、ゆったりとした日程で滞在し、娘の希望や体調に合わせて、私の案内で、よく歩きまわりました。先程の自分自身への働きかけをする前は、同じ地にきてても、自宅にいた時と同様、家事に追われ、あとは自分自身の疲れを癒すことに熱心だったので、娘の方も期待感がなくなっていました。天候に合わせて、滝めぐり、山歩きあとの露天風呂、川魚の養殖場を森林浴しつつ散歩、雨の日の寺院や、庭園めぐりと、手近な行動だけでも、いろいろな体験ができました。休暇の関係で父親が一足先に帰ってしまっても、娘は、私の故郷での生活を、もっと続けたいと要求していました。東京とこの地との比較などもしていました。どうして、こんなに気持ちが悪く落ち着いてのんびり

できるのか、とか、こんな静かなのに、他人に遠慮でもしているように草刈りの道具を動かして、東京は、人がたくさんいてうるさいのに、もっと大きな音を、遠慮しないで出し合っているのはどうしてか、とか、空気がきれいと感じたり川が飲める位きれいで臭くないのに、どうして東京にはないのか、毎日比較検討して、自分なりに考えているようでした。いつのまにか騒音に慣らされていた私達には、こわすぎる位静かだった夜が、居心地の良いものになるのに数日かかりました。

私という視点からは、“面倒”という文字がまず浮かび上がってくるものも、娘の視点から見ると、新鮮で、初々しく、心がさわやかになるものなのでした。特に二人での生活になってからは、私と娘がお互いに相手の存在が不可欠という強い結びつきになっていききました。こうして娘と行動した日々の方が、実は私自身にとっても、とても心も体も休まる日々になったのでした。

一方、行政の企画に応募したものの一つに多摩動物園の飼育指導があります。この時は子のみの参加だったので、二時までの六時間は、本でも読んで待つている覚悟で参加しました。係の方に子どもを預けると帰る方もいました。ところが、親切な事に、子と別れた後、大人には、シルバーボランティアの方々がガイドに付いて下さり、朝の園内散歩としゃれこむ事になりました。その時の注意事項に、たとえ途中で子どもと出会う事があっても声をかけたり世話をやいたりしないで下さいね、というものが、過干渉、過保護の実態があるようだと感じました。待つどころか、普段体験できない静かな朝の動物との触れ合いや、シルバーボランティアの方々のホットな説明に、感激していました。それは娘に、“ありがとう”と言いたい喜びでもありました。娘の方は、娘で、学ぶものが多々あり、帰りは、お互いの情報交換で賑わいました。つい子どもとつき合う事は、私に犠牲を強いることでもあると思っていたけれど、実は娘によって、より

豊かに生かされているのでないか、と気付かされた夏休みの体験でした。やはり、体験してわかる事もあるのです。

仕方無しにはなく、喜んで積極的に「親業」してみる事から、生き生きと息づいてくるものがあるようです。そういえば、『大草原の小さな家』という本の中に、すぎな家族が登場しますが、学校は生活の一部であり、大人は、学校では教えられない、労働を、近隣の人々との付き合いを、人生を……と教えていきます。私達もその親の姿を受け継いでいきたい、と思いました。

最近行政サイドから、育児に疲れたり、親の余暇を保障する為にも、保育所の一時預かり等も勧める時代になってきましたが、このような柔軟な対応は、ごく最近の事です。十数年前は、子どものお迎えにくるのに、早く会いたくて、バス停から走ってきて、「ただいまー」と抱き合う姿は、そう珍しい姿ではなかったのです。ですから、自分の休みの日に、我が児と過ご

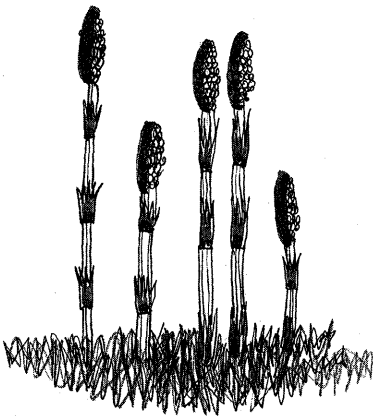
す事は、人に言われなくても当たり前のこと、という受け止め方を、多くの方がしていました。ここにも時代の流れがあります。

育児休業中で、母親は在宅しているけれど、夏休みの無い子がいました。「この子には、集団生活の方が必要なのです。」と言い切るのです。しかし、夏の疲れの心配、親とのスキップの必要性と言われる事は、我慢がならないが、保育者の労働条件の為に協力してくれ、という話なら理解できるし、担任の先生の休みの日は、休ませてもいい。でも、決して子どもの為になんて言わないで欲しい、と言われた事がありました。保育者が投げかけられた新しい母親です。保育者が、その子の情緒的な状態が、親との関わりを深めた方が良くと判断した必要性から、あえて申し出た事でした。子どものサインの読みとりが、母親と保育者と違っていたというだけでなく、信頼のおける保育所なら、親と過ごすより幸せなのだという、親の価値観が大きく違っていたようです。保育所もずい分と期待

されたものです。確かに期待されるべく、保育所もより改善していく努力はしています。

例えば、乳幼児期に、いろいろな保育者に変わる事は、子どもの人間関係を築く上で良くないという検討で、担当制や持ち上がり制にしたり、大人の休みの代替も、いつも同じ保育者が入る体制を取り、子どもの成長にとって何が必要かというサイドで真剣に取り組んできました。又、食事も、保育所は、○歳児三人に保育者一人という、都基準がありますが、その中でも大人の動きを整理して、イスにしっかり安定して座り、スプーンで自分でもすくい、保育者の補助の二スプーン（子どもと保育者がそれぞれスプーンを持つ）の日まで、保育者に抱かれたり、イスに座っての一对一の食事に行っています。保育所というところ、一斉に何かする、という流れを連想されるかもしれませんが、それは昔話になりつつあります。一人一人朝の勤務時間も異なるわけですから、その子の朝の家庭での生活リズムを考慮して、昼食の食事時差が出てくるのは、当

然の事です。そういうわけで、二歳児クラスになって
も一斉に食事に入ることはありません。月齢が低くて
早く空腹になり眠くなる子たちから担任の保育者と食
事に入っていきます。ただ子ども達は、生活の流れを



よく把握しているので、大人の都合で、食事のタイミングを大幅にずらさないように、家庭にも協力はお願いしています。

これらは部分的な紹介ですが、いつも子ども達が、より快適に、じっくり遊べたり、健康に過ごし、一人の個が守られる環境づくりに保育者が日々努力している事は、確かなことです。しかし、どんなにりっぱな、胸を張れる施設があつたにしても、それは、父親母親の存在にはなれないのです。そして、一生共に生きていくわけにはいきません。

親になつても、髪振り乱したりせず、すてきな生活を楽しめる事は、素晴らしいのです。ただ、はいはいしかできない子どもでも、よちよち歩きの子でも、仲間入りした楽しい生活にして欲しい、成長して少しは忍耐力のついた大人の方が、小さい仲間のゆつたりとした歩みに、人生のほんのわずかな日々を、歩調をあわせて欲しいという願ひがあります。子どもを、年末ベビーホテルに預けて、海外で遊ぶなどという話は、

ちょっと首をかしげてしまいます。それが本当にリッチな時代の話の内容でしょうか、はたと考えてしまいます。保育者と親と、二人三脚で育児をしていきましよう等と良く言いますが、実質はもっと親の占める比重は多い筈です。保育所は、全面的に、子育てを引き受けるわけではないのです。

乳幼児期の子ども達と今までたくさんおつき合ひしてきましたが、自分を愛し、気まぐれでなく、いつも育んでくれる人を大好きになつてくれます。子どもとの愛情関係というのは、本能としてあるものだったり、天から降ってくるものでなく、一緒に、目の前にしっかりと立ち、見つめ合い、育児する事で、しっかりと根付くものではないか、という気がします。

ある父親の体験です。生後四か月になろうとする頃、母親の短期入院という事態になりました。自力でやりくりする事にしましたが、それまでは、ウンチといえは母親に、ミルクといえは母親に、と任せていた生活が、一転して、一人で全てを引き受ける事になつ

てしまったのです。不安というより、次々と追われる

育児行為、家事の忙しさで、つい自分の夕食を食べるタイミングを逃し、夜中になってしまった事もあるそうです。そんな日でさえ、泣かないで眠ってくれた娘の寝顔に、幸せ気分を味わったり、こんな大変な事態に、良い子でいてくれ父親の慣れない育児で我慢してくれる、と嬉しく感じたり、便性の良し悪しの判断がつかず保育者に相談したり、と娘との数日の生活で、娘への愛しさが増していく様子が感じられました。日中は、保育所でのいつも通りの生活があり、こういう時は、本当にお役に立てるし、相談相手にもなれる所です。やはり、一緒に汗まみれで子育てすることで、親としても育っていくのだな、母性、父性は、理念としてだけでなく、共に見つめ合い、肌に触れ合い、汚れ合い、泣き笑いし、深まるものではないかと思えます。ですから、便利でも、人まかせにしすぎないで、子どもと生きる時間を、もっともっと持つ努力をする事が、親子相互にとって必要なのだと思うのですが、

いかがですか。

保育所の保育時間は、けっこう長いものですから、睡眠、食事、排泄といった生活部分の占める割合も多くなります。今保育者の悩みの一つに、子どもの睡眠の問題があります。○歳児クラス位でも、夜の入眠時間が遅いケースもある位ですから、午睡だけをとらえず二十四時間の流れで、どう十分睡眠をとれるだろうか、どのクラスにも悩みはあります。一歳児ですが、午前中遊べる元気も無く、ぼーっとしているので、食事に十時半には入ったのですが、十分食欲を満たす前に、限界になり布団に入り、三時間以上眠り、やっと元気になりました。その子の昨夜の生活を見ると、翌日この様な状況になる姿を、予測できるものでした。家族でカラオケBOXに出かけ夜遅くまではしゃいだのでした。保育者は、親にその日の子どもの様子を話し、夜の睡眠は、きちんと考えて欲しい旨伝えたところ、「カラオケは、家族の触れ合いの場なのです。親子のつき合い方にまで、口を出されるのは、プライバ

シーの侵害です。」と、逆に叱られてしまった事があ
ります。

親との対応は、本当に難しい課題です。先生、とい
う立場で上から物を言っつては、聞く耳さえ持たれない
でしょう。相手が、一歳児を深夜まで刺激の多い騒音
の中で、遊ばせていけないのは何故か、疑問を持つ
きっかけを作り、理解し、結論を自分の力で引き出し
てくるまで、保育者はじっくり関わっていく事が要求
されてきます。保育者は、多少は大脳生理学とか小児
の成長に関しては、学びつつ仕事をしている筈なの
で、相手との共通理解のできた言葉で、納得のゆくま
で、持っている知識は伝達していく義務があります。
でもこんな断片的知識を学校で習わなかった筈の昔の
人が「早起きは三文の得」とズバリ諺で言ってるので
すね。時には理屈をこねまわすより、こんな諺でざっ
くばらんに話す方が効果がある事もあるでしょう。
りっぱな理論でも、親との信頼関係がなければ生きて
きません。自分と全く違った価値観を持つ親とも、あ

せらず、あきらめず向かい合う強靱な精神力が要求さ
れています。でも、担当児との出会いを思い出すと、
さほど親との対応も難しくはなりません。赤ちゃん
の一つ一つの仕草、泣き声が何を求めているのか、手
探りでいろいろ感じやってみます。すぐに反応がなく
ても、見つめ合い、あやし、語りかけます。日毎に、
その子の合図が迅速に理解できるようになっていきま
す。こうした努力を、相手が大人でもすればよいのだ
な、と思うと、手の届く所に相手が見えてきます。パ
ターン化した対応ではなく、一人ずつ違った顔を持つ
親に、柔軟に対応できる保育者でいたいと思います。
その為には、親にも、保育者にも、もっとゆとりが必
要です。余裕は、豊かな発想を生み、相手への許容範
囲も広がります。

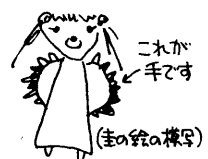
(立川たんぼ保育園)

ある日の育児日記から
 (27)
 佐藤 和代 ***



有の保育園が決まりました。圭と同じ園です。有が生まれる前に仕事をやめていたので、入園が決まるまではハラハラ。何しろ、申込み書には「母親の仕事：内職、一日二時間」と書いたのです。入園は、「保育に欠ける」状態の切実な順です。入園は、ランクとしてはかなり下のほう。しかたないので、申し込むとき、他の資料をたくさんかかえていきました。「フリーで編集の仕事をしています。これが昨年の確定申告。この本は私の名前、載っています。五月からの別の仕事もきます。これが企画書…」恥ずかしながら「幼児の

教育」も持参しました。「これ連載中です」三年前、圭の入園を申し込んだときは、各園の特色も、優先順位のつけられ方も知らず、ただ申し込み書を一枚、置いてきただけ。ダメでもともと、という感覚でした。でも二人目の子はそうはいきません。ひとり保育園に通っていれば、いろいろ情報はいってきます。ぜひこの園へ通わせたい、という思いいれも強くなるし、書類一枚ですませてはダメということもわかってきました。役所の窓口であれこれ訴えるなんて、私の一番苦手な分野。でも子どもにかかわることになるとがんばってしまいます。母は強し。なーんて自己満足かしら。



手に竹かをした有たち。表現力は3才に負けます。

婦人宣教師、ミセス・プラインの
「おばあちゃんの手紙」(6)

～アメリカン・ミッション・ホームの
創立者の一人～

小林 恵子

八、

横浜 一八七二年五月十五日

愛するメアリーへ

懐かしい故郷のアルバニーで私が貴方たちとお別れして、今日は丁度一年めになります。私は、このホームが故郷の貴方たちのところから遠く遠く離れていることや皆と別れてから長い年月が過ぎ去ったことを考えると、たまらなく悲しくなります。でも神様がずっと私を守って下さり、感謝せずにはいられないほど沢山の良いことをこの一年の間に与えて下さったことを考えると今の私にはとても悲しんでなんかいられないと思うのです。

さて、時間を楽しく過ごすために、そして貴方もきつと興味をもってくれるだろうと思って今日は私が田舎に遠足に行ったときのお話をしましょうね。このお話は日本人がどんな暮らし方をしているか、私たちとは違った変わった暮らし方をしているのを少しでも貴方に理解して貰えるのではないかと思います。

一緒に行った人は、バラ宣教師と彼の二人の娘と小川夫妻と二人の立派な日本人のクリスチャンでした。遠足

に行ったというのは、この湾の反対側に住んでいる人々が横浜の宣教師たちの教えについていろいろ聞いていて以前そちらに住んでいた小川さんにイエス様について話すことのできるクリスチャンの先生を一人連れてきてくれなしかと頼んできたのです。私たちはそれは素晴らしいことだと思いました。私たちは聖霊の力によって、その人々が真理を受けられるようにいつも祈ってききましたので神がその祈りに答えてくださったのだと強く感じました。そこでバラ宣教師と小川さんが行くことになったのですが私にも一緒にいくようにと言いましたので行くことにきまったのです。

私たちは日本の小さな船のついでに湾を渡っていききました。それはとても変わった面白い経験でした。この船はおかしな格好をしていて私たちの国の小船とはまるで違うのです。その日は風がひどく強く吹いたので私を含めて何人かはひどい船酔いにかかってしまいました。それで私は縄や板切れなどが置いてある船底で寝ていなくてはなりませんでした。そ

してとても気分が悪かったので船が向こう岸についたとき起きて岸にあがれないんじゃないかと思うほどでした。

船が止まってまもなく船酔いはよくなったのですが、そのとき私たちが見たものは何だったと思いますか？ 何とまあ、船は岸から一マイルほど手前に止まっていたのですよ。水が浅くなって船は砂のなかに埋まって動けなくなり、それ以上は岸に近づくことができないのです。まったくお手あげです。そうでしょう？

でも、この人たちはそんなことは慣れっこになっっているらしく余り気にもしていないのです。そして、ここでは水夫たちのことを「船頭」などと呼んでいるのですが、この人たちが船のへりをまたいで二フィートほどの深さの水のなかに入り私たちを背中におぶってむこう岸まで運ぶというのです。このありさまを見て私の船酔いはすっかり吹きとんでしまいました。なぜかという、人々が船頭におぶって貰って向こう岸に運ばれる様子がとてもおおか

しくて大笑いしてしまったからです。でも、私にはとてもあんなやり方で向こう岸に行く事はできないのでバラ氏に二人で腕で椅子を作るやり方（運動会などで騎馬戦のとき、よくこうした腕のくみ方をする）を船頭たちに教えてやってもらえないかと頼みました。それはどういふふうにやるか貴方に判りますか？ その上なら座れるかもしれないと思つたのです。だって足をひろげて男の人の背中におぶさるなんて私にはとてもできなかったのですよ。

さて、そこで船頭たちはバラ宣教師に教えられたように腕で椅子をつくってくれました。そして私はその上に乗って進み始めました。最初は結構うまくいったのですが岸まであと半分というところで船頭たちの腕が次第にゆるみ始めたのに気がつきました。そして、とうとう私は彼等の腕からすべりおちて水のなかに投げ出されてしまったのですよ。私はおかしくてあんまり笑つたので暫くは歩くことさえ出来ませんでした。でも、やっと歩きだし岸までの浅い水のなかを歩いて無事に乾いた土の上にとどり

つくことができました。岸には先についた人々がみな立って私を見て笑っていました。この経験は私のために大変よい教訓になったと思つています。これからは自分が他の人よりもっと賢いとか良いなどと思ひあがることをやめ、もっとこの国の人々のしてゐるようにして、最も良いやり方を学ぶようにしたいと思ひました。

私たちが海岸に着いたとき、近くの人々や子どもたちが物見高く集まって来ました。人々がなぜそんなに私たちのまわりに集まってきたのか、あなたは不思議に思ふかも知れませんがこの土地の人たちにとっては白人や白人の女性を見るのは生まれて初めてのことだったのです。

予定から少し遅れ、私は「乗り物」に乗って、他の人たちは馬に乗って私たちが招待されている人の家がある田舎の方に向かって出発しました。「乗り物」というのは、高さと幅が三フィート位の四角い箱で人ひとりが座るのに丁度ぐらいの広さなのです。この箱の中では乗る人は足をびったり折つて、

“仕立てやスタイル”で座らなければなりません。
箱のてっぺんには一本の棒がしっかり渡されていて
二人の男がその棒を肩にかついで進んでいくので



す。最初は快適でしたが、やがてすぐにこのように
足を折ってじっとしている姿勢に疲れてきて、おま
けに乗り物の揺れで船酔いのとときと同じように気分
が悪くなってきました。

さて、私たちは美しい田舎道を通って行きまし
た。私は百姓たちの暮らしぶりや田畑のようすなど
を見ましたが珍しいものが沢山あって、全部を貴方
にお話したいのですが今は少しだけでもお話しし
ましょうね。日本ではどこに行っても、お米が植え
られています。この国では、お米が主食なのです。
日本の人々は私たちがいつも食べているパンを食べ
ないでその代わりにお米を食べているのです。お米
をつくっている田んぼはいつも水でおおわれていま
す。そして、じゃがいもや豆や大根など他の作物を
作るときは土を三フィートばかり地面より高く盛り
あげてその上でこれらの作物を育てています。こう
した小さい四角い田んぼや畑が見渡すかぎり続いて
様々な色の違った作物が育っているのを乗り物の中
から見るのは本当にきれいで珍しいものです。

それから、この土地の人々は梨の木を栽培するのにとても面白いやり方をしています。梨の木を長い列になるように木と木をかなり近づけて植えています。そして七、八フィート位の高さまで成長すると枝をまげてお互いからみあうように紐で結びます。やがて木々が適当な高さまで育つと、その下はまるで長いホールか通路のようになり両側に規則的な木の柱がたち並び、頭上には美しい緑の葉がうっそうと茂ったすてきな天井ができあがるのです。高いところからこうした梨園を見おろすとまるで緑色の床だけがあるように見えます。このように梨園を手入れするのはいろいろと大変な苦勞がいるものです。それは本当に美しいものですが梨の実はまだ美味いとは言えません。陽が通らないからなのでしょうね。太陽の光って大切ですね。

私たちが泊る家のご主人はアルバニーのバトルーン氏に似ています。彼は大変お金持ちで何百人もの家来をかかえているのです。これらの人々は正確には下男というわけではありませんが彼の支配下に

あつて庇護されています。彼の家はとても大きくて堀または水路のようなものに囲まれています。これは敵が攻めてくるのを防ぐために作られているのです。私たちは大きな石の橋を渡りどっしりとした門がまえのある道を通つてもとても大きな広場にできました。周りには大小の沢山の家々が並んでいましたがどれも美しくきちんとしていました。

私たちはこの広場をとおりぬけ、もう一つのあまり大きくはありませんがとても優雅な門を通つて庭へと入つていきました。その庭はすばらしく美しいもので、小さな湖や滝がありミニチュアの山や洞窟、岩屋、橋などがあり、いろいろな種類の樹木が植えられていました。ところがその樹木というのが常緑樹で、船や家、犬、鳥などの形に刈り込んであるので、その完璧なほどのすばらしい技術を貴方にわかつてもらえるかしら？

さて、私たちはとても丁寧を迎えられて家の中へ通されました。でもそこには私たちの考えにそぐわない物が沢山置いてありました。ある物は私たちか

ら見ると、かなり野蛮なものに思われました。でもこの家の人たちはそう思っていないでしょうから私たちがこれは変だなどと言うのは差し控えておきました。

私たちがどこへ行っても閉口したのは―これはお金持ちの人々にも貧しい人々にも同じことが言えるのですが―外国人の着ている服や持ち物を物珍しそうにジロジロと見られることです。

日本人は私たちのようなベッドを使わず床の上にじかに寝ていても重たいふとんをかけ、木で作った枕を使って寝ています。私たちにはそのような木の枕では眠れませんので自分の使っているシーツと枕を持っていきました。また、私たちは日本人の食べ物もあまり食べられないので肉や果物の缶詰やパンやバター、ケーキなどを包んで持っていきました。

私たちが食べ物のお包みを開けたとき、この人々の物珍しげな様子といったら、本当に面白いものでしたよ。この家のご主人やお年寄りのお母様、そし

て家来たちの小さな子どもたちに至るまでみんなが包みの中に何が入っているかと私たちの周りに集まってきました。

こうした日本の名士の家では家来たちや家来の子どもたちがまるで家族の一員であるかのように自由で親しみがあがり、それでいて彼等はいつも礼儀正しく自分たちの立場をよくわきまえているのです。また、家来たちは主人から大切にされていて、私にはどっちが主人でどっちが家来なのか判らないほどでした。

ここのご主人がとても親切でいろいろと私たちのために気を使って下さるのに私たちは自分たちのために食べ物を持っていったことを本当に申し訳ないと思えました。でも、どうしてもやむをえなかったのです。今のところ、卵、鳥肉、魚、じゃがいも以外は食べることのできるものがないのです。でも、たぶん少しずつ私たちも日本の風変わりな料理になれて好きになるかと思えます。

「おばあちゃんの手紙」があまり長くなりますの

で今日はこれくらいにしておきましようね。あまり
沢山、面白いことがあったので残りはこの次にまた
書きたいと思います。

「神様がアメリカにいる私の可愛い子どもたちみ
んなを祝福してくださいますように」

おばあちゃんより

*

十二、

横浜 一八七二年十月十二日

愛するバーティーへ

だいぶ前のことだけど私が東京湾の向こうの地方
に遠足に行ったお話をしましたね。さて、今日はそ
のお話の残りをアメリカにいる貴方たちにしましよ
うね。…略…

佐久間さんの家で過ごした最初の晩―佐久間さん
というの私たちを招いてくれたご主人の名前です
―その家の人たちはとても親切で私たちにベッドを

用意してくれたのですが、それは大きな木のドア
をはずして持って来たものでした。床の上に幾つか
の大きな木片を並べ、その上にドアを置いて床か
ら高くなるようにし、そのドアの上に何枚かの赤
いウールの毛布を敷いてくれました。この家の人た
ちとしては精一杯のおもてなしだったのです。なぜ
なら当時の日本ではまだウール製品は使われていな
かったのです。日本の人々がウール製品の何かを見
たのはごく最近のことなのです。外国の商人たちが
いろいろな色の毛布を日本に持ってきて日本人がこ
れをととても気に入ったのです。そしてこれらの毛布
を買う事のできるお金持ちの人たちは自分たちがこ
ういう毛布を持っている事を誇らしく思っていました
からこの家のご主人もこの時とばかり新しい毛布
を使って私たちを喜ばせようとしたのです。

私たちはそのベッドに寝てみましたが毛布を敷い
てあるだけですから、堅くてどうも寝心地が悪く畳
の上にそのまま寝る方がまだましという結論に達し
たのでした。

次の朝、私たちが朝食の仕度を始めるとその家の人たちが今度はドーアーをテールになるように整えてくれました。そして、その上にあの赤い毛布をテールクロスとしてかけてくれたのです。はっきりに言つて有難迷惑なことだったのですがせつかくの好意に対して何も言えませんでした。そこでこのテールの上で食事をしたのですが毛布の上に食べ物をこぼさないようとても気を使いました。

朝食がすむと私たちは十二マイルほど離れた鹿野山という山に登る仕度をしました。そこは美しい景色と山頂にある大きな古いお寺で名高いところです。また山の特定な場所から見る景色の素晴らしさでも有名でした。私たちはその場所から九十九の谷々を見下ろしました。谷の間に小さな村や田畑が点々と散在し、それらが美しい眺めをさらに魅力あるものにしていました。

私たちはこの山頂で激しい雷雨に見舞われました。…略…(幼い頃、嵐の日に母がひざの上で教えてくれた詩を書き、嵐のなかにも神がおられること

を記している)

嵐は長く続いたので私たちは一晩じゅう、山頂にいなければなりません。寝床も私たちのための食べ物もありませんでしたが何とか無事に過ごすことができたのです。でも、あんな激しい雷雨の様子や翌朝の輝かしい日の出の光景をこの目で見られたのですもの、少しくらい苦しかった事は仕方ないと思いました。

その日の夕方、私たちは佐久間さんの家に帰りました。私たちが前もって頼んでおいたようにバラ宣教師がその人たちをみんな集めておいてくれたのです。そこでキリスト教とは何かということを話すことになっていました。…略…

ちょっと、想像してみてください。まわりが壁で頭のうへは真っ暗やみの大きな部屋、一方の側にわずかの薄暗い行燈がまばらに置かれ、もう一方の側には大きな祭壇か神だながあるのです。この祭壇のなかには三十ほどの大小の偶像があつて日夜この家族たちが拜んでいるのです。この部屋の一方にかな

り多くの、たぶん五十人か六十人の肌の薄黒い頭のはげた（この国の男性はみな頭のとっぺんを剃っているのです）人々が床のうえに座っていてもう一方にはバラ宣教師と私たち、そしてこの家のご主人が家族と共に座っていました。これで、この集まりがどのような光景だったか貴方に判ってもらえるかと思いますが、これはこの地方で初めてイエス・キリストの名前が人々に知らされた集会だったのです。この人々があんなに熱心に福音に耳を傾けようとしているのを見て私は本当に喜びで胸が一杯になりました。人々はバラ宣教師が話しているのを誰も止めさせようとはせず、夜の十時過ぎに話が終わると小川さんに質問して十二時ごろまで質疑応答が続けられました。：以下省略：

二回にわけて書かれた手紙は同年五月に横浜から東京湾を船で渡って房総半島へ旅したときの記事である。

ユーモラスな事件が幾つかあり、百二十年前の日本が異

国のように思われる。今の私たちには木の枕ではとうてい眠れそうにない。ドアをベッドやテーブルに使おうと考えたり、赤い毛布をテーブルかけに使ったり、とても滑稽な話であるが当時の日本ではこれが精一杯のおもてなしと考えたのであろう。

雷雨に見舞われた鹿野山は標高三五二米、上総国の最高峰で山頂に聖徳太子ゆかりの神野寺があり参詣客が多く、江戸時代は上総から安房への街道が鹿野山を通過していたので門前町兼宿場町として栄えたところである。現在には近くにマザー牧場が開設されている。

紙数の都合で二回めの手紙の最後は省略したが旅の目的であるこの地方でのキリスト教伝道について書いている。当時の集会は行燈の薄暗い光のなかで宣教師の話を中心にしたものであるが野次がとんで思わぬ危険があったり、キリスト教伝道は大変困難な時代であった。

（国立音楽大学）

今月は〈なおす〉ということについて

考えてみました。『なおす』という言葉には、正しくする・病人を治療する・もとの姿形にもどす・こわれた物を修理する・文章や作品に手を加えてよりよくするなどの意味があり、また関西地方ではしまう、とか片付けるという時にも使われています。どの場合も、結果的には今ある状態から、より好ましい状態にするということなのでしようが、それぞれのなおす立場によって、より好ましい状態が微妙にちがうようです。

機械の修理などは、最近は部品を取り変えるだけで済むことが多いようで、これはなおった状態がはつきりとわかりやすい例です。ところが相手が人間、特に子どもとなると、話が複雑になってきます。どうなおすかというより、どう育てていくか、ということと重なり、より好ましい状態というのが、なおす側の価値観・人生観・教育観、また、なおされる側の性格などにより、大きく変わって

るのでしよう。

我家の近くに小さな小児科の病院があります。そこでは、午後になると近所の母親達が集まり、院長の女医先生を囲み、子育ての勉強会をしています。はじめは、先生からの一方的な予防のお知らせだったのが、だんだん話し合いの形式になり、勉強会になったそうで、この小さな病院が都会の中で一人で子育ての悩みをかかえ孤立している若い母親達の地域の拠点となっているということです。

また、私が子どもの頃、我家のピアノをなおしてくれていた調律師さんは、調律がすむと、ピアノの中をていねいに掃除機で吸いとり、防虫剤をおき、外側もワックスをかけてくれ、幼い私に、いつも必ず、「これは良いピアノですから大事に弾けば、まだまだ良い音ができますよ」と言って帰りました。

どちらもなおされる側への温かい配慮が感じられ、そのことがなおす効果を一層高めているのかもしれない。(K)

幼児の教育

第九十二巻 第三号

(一九九三年三月号)

定価四五〇円(本体四三七円)

平成五年三月一日 発行

編集兼発行人 本田和子

発行人 日本幼稚園協会

東京都文京区大塚二一一一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

東京都港区三田五一一二一一

発売所 株式会社 フレーベル館

東京都千代田区神田小川町三一

振替口座 東京九一一九六四〇

電話〇三二三九二一七七八一

●本誌御購読の御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします

●万一、落丁・乱丁などがございましたら、おとりかえいたします。

名作童話の世界があなたの保育技術と演技力アップで
子どもの心によみがえる

ザ・エプロンシアター

いきいき保育資料①

中谷真弓・著



AB判・80頁・定価2,500円(税込)

ザ・パネルシアター

いきいき保育資料②

阿部 恵・著



AB判・80頁・定価2,500円(税込)

保育者と子どものかかわりに重点をおいて編成されたもので、演出の
細かな注意点と指導例があげられています。

劇のストーリーを楽しむだけでなく、保育者と子どもが会話をしたり、
合唱するなど、劇遊びに参加することから子どもが身近な社会・自然・
生活などに興味をもち表現力や社会性の養成に役立ちます。

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)3292-7783(代)にお問い合わせください。

キンダーブックの
フレーベル館

フレーベル館創業 **85** 周年記念ビデオ出版

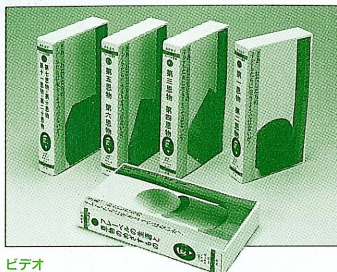
教育遊具 フレーベル恩物 gabe

ビデオ へ全五巻へ

幼児教育の先駆者、F.W.フレーベルの生涯と、
自らが考案した恩物の使い方を体系的に収めた
世界で初のビデオが完成！

フレーベルの遺した幼児のための最高の贈り物「恩物(Spiel gabe)」について、その根底に流れる思想と、その望ましい与え方、使い方を幼稚園での実例やコンピュータグラフィックスなどで、わかりやすく解説したビデオです。

発見は遊びの中に。
現代の子どもたちへ
ゆたかな創造力を導く
フレーベルの恩物。



ビデオ

教育遊具 フレーベル恩物gabe(全五巻)

第1巻・フレーベルの生涯と恩物のめざすもの

第2巻・第一恩物 第二恩物

第3巻・第三恩物 第四恩物

第4巻・第五恩物 第六恩物

第5巻・第七恩物～第十恩物

第十一恩物～第二十恩物

全5巻 紙ケース入 70,000円(税込)

(分売不可)

★カラー/ステレオ/HIFI

監修 ■ 和久洋三
(おもちゃの科学研究会代表)

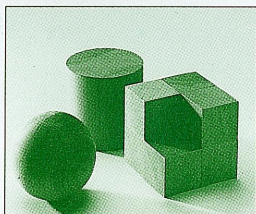
企画協力 ■ 青木八代
(元 玉成保育専門学校教諭)

指導協力 ■ 学校法人アルフィン学園
玉成保育専門学校

撮影協力 ■ 学校法人アルフィン学園
玉成幼稚園

◆恩物遊びのねらい◆

- 自発性を引き出す
- 身体の器官、機能の発達を促す
(活動性を満足させる)
- 創造力を育てる
- 集中力を養う
- 情緒の安定を回る
- 自分で後片づけする習慣を身につける
- 科学的思考の基礎を養う
- 美的感覚を養う
- 社会性の基礎を養う



遊具の原点は、保育の原点。
遊具である「恩物」を子どもの世界へ。

● 推薦します。

広島大学名誉教授/日本ベスタロッチ・フレーベル学会会長
日本保育学会前会長・同名委員会

莊司 雅子

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)3292 7783(代)にお問い合わせください。

キンダーブックの
フレーベル館